

研究通信

No. 14

研究会	研究部	研究部	研究部	研究部	研究部	研究部	研究部	研究部	研究部
東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学
東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学
東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学	東京大学

大会批判と提案

後藤和夫

昨秋の東京大会をふり返って、たった一何とも心のこりであったのは、午後の討論の部が低調であったことです。このことは、何よりも我々の突破的方向への意欲の不足と研究上の弱点を示したものと見て反省させられました。この点前号の生田氏の意見に強く同感します。生田氏の「柄でもないテーマ」という言葉には、唖ってしまつたのですが、しかし私は村研が今後も意識的に柄でないテーマを選ぶように、そしてその間に我々自身の方が、テーマの柄に合うように成長することを期待します。

村研は勿論一つの学会ですから、実践的な課題のみを一面倒にえらびつゞけることを期待はしません。従来社会学一般に対するある種の「もどかしさ」からも、せめて村研がそのような課題を遂げのに積極的な態度をもちつゞけ、いわゆる「学者の集り」らしさから、ある程度までは脱け出すことを希望します。その点から、大会で決定しなかつた本年度の課題については、あそこで話題にされた限りでは「町村合併」の向題の方を支持したいと思つてます。

私は戦時中から引きつゞき、農繁期には本

取の百姓と一しよに飯をにぎって泥をこねたりする半農的生活を送っており、農民運動も町村合併も直接実生活に影響する向題として受けとる立場にありますので、右の希望やその底にある前々からの社会学に対する「もどかしさ」が、ごく私的な所から発するものではなにかをおそれています。しかし社会学があのさびしいファシズムと戦争の時代にも一片の抵抗の記録も残さなかつた（或は残す必要さへ感じなかつた）学向であることと、戦後の時期にどれだけの自己批判を行つたかを考えますと、最近の新しい学風が発展に心算を覚えながらも、我々はなお方法や技術の以前にあるものを向題とする必要があると、ひそかに思わざるを得ません。農村在住の半農民として生活する一地方会場の村研に對するねがいを汲みとつていただければ幸いです。

（愛知学芸大学）

